

日本人入蔵僧資料に見る戦時期「喇嘛教」工作と熱河承德 ——多田等観関連資料を中心に——

高 本 康 子

1. はじめに

満洲事変から 1945（昭和 20）年の終戦までの昭和期において、日本の外務省、軍部そして仏教各派が、「喇嘛教」すなわちチベット仏教に対し様々な活動を行ったことに関しては、現在未調査の部分が大きい¹⁾。本発表では、明治以降の日本人入蔵者が残した個人資料、特に多田等観（1890–1967）の未公開の日記、手稿等を取り上げる。これらは日本人の対「喇嘛教」活動を、満洲国建国前後の熱河省承德を焦点として明らかにするという点で貴重なものである。

2. 日本の「喇嘛教」工作と熱河

明治以降日本人が行った対「喇嘛教」活動は、①情報収集、②主要人物の来日招請、③現地チベット仏教寺院組織の「改革」の 3 種に大別される。①情報収集の最初の例は、1897（明治 30）年の、外務省と陸軍の支援による、成田安輝のチベットへの派遣であると思われる。以後①は主にこの両者によって、第二次世界大戦終戦まで継続される。②主要人物の来日招請とは、有力活仏を日本に招き当局各位との連繋形成を促進し、更に各所の参観によって日本理解を深め、現地における日本人の活動の円滑化を図ろうというものである。これは 1901（明治 34）年の雍和宮活仏阿嘉呼図克図の来日が嚆矢と思われ、その後ドライラマ、パンチェンラマの来日招請計画もあったが、実現していない。日中戦争期には、満洲国、蒙古連合自治政府管轄下の有力寺院の活仏を定期的に日本見学に送り出していた。この種の活動の主体には、外務省、陸軍の他、真言宗等日本仏教各派、善隣協会などの民間団体も含まれる。③チベット仏教寺院組織の「改革」は、主に満洲国、蒙古連合自治政府の行政当局が主体となって行われたもので、寺院と僧侶に対する統括の実効性を高めるために、その寺院組織の再編と、僧侶の資格検査および僧侶対象の普通教育を実施するというものである。満洲国では 1940（昭和 15）年、

(2) 日本人入蔵僧資料に見る戦時期「喇嘛教」工作と熱河承德（高 本）

蒙古連合自治政府では1942（昭和17）年から開始されている。

一方、熱河省承德は、清代に、離宮「避暑山莊」と、「外八廟」と呼ばれる大規模な寺院群が建設され、後者は特に、満洲におけるチベット仏教の名刹の一つとされてきた。日本人にはなじみがない地名であったが、建国まもない満洲国への熱河省合流を目指して1933（昭和8）年2月に開始された熱河作戦は、熱河承德への認知度を飛躍的に高める契機となった。これは関東軍および満洲国軍の軍事行動であり、電撃的な成功を収めた。作戦展開とほぼ並行して、熱河省内の鉄道敷設が開始され、1936（昭和11）年までの3年間に急速に整備が進められた。1938（昭和13）年にはほぼ鉄道網の整備が完了、その結果承德は、満洲における主要観光地の一つとして、例えば1942（昭和17）年には、年間15000人の観光客を迎えるに至る（五十嵐牧太『熱河古蹟と西藏芸術』第一書房、1942年、192頁）。

熱河作戦直後から関東軍は、熱河省に隣接する内モンゴル東部を、満洲国の国境地帯安全化のために確保する活動を開始していた。本稿では、この活動への協力を要請され満洲で活動した経験を持つことに注目し、多田等観を取り上げる。

3. 多田等観と熱河

多田等観は、明治末から大正期にかけて、浄土真宗本願寺派法主大谷光瑞に派遣され、チベットの首都ラサ郊外の名刹セラで10年間修学した経験を持つ。帰国に際して膨大な点数のチベット仏典を将来し、日本のチベット仏教研究に寄与した。ダライラマ13世その他チベット要路の人々との親交でも知られ、戦時中から彼の逝去直前までその連絡が維持されていたことは、残されている彼の日記や多数の書簡から明らかである。

彼は熱河作戦が行われた直後、1933（昭和8）年とその翌年、いずれも外務省と関東軍の要請で7-9月に満洲とそれに接する内モンゴル地域を訪れている。この2回の大陸訪問についてはすでに、多田等観資料としては最多の所蔵点数を持つ花巻市博物館の学芸員寺澤尚が、日記原文を精査し旅行日程等を明らかにした²⁾。本発表はこの成果をふまえつつ、日記にその他の資料を加えて記述の再検討を行い、特に「喇嘛教」工作の点から多田の活動の意義について考察を試みるものである（以下日記引用については年月日のみ記す）。

彼は最初の大陸行直後から、彼なりの対「喇嘛教」活動の具体案を構想し、関係当局に働きかける一方で、その実現を目指して自分自身でも行動した。

多田等観の「喇嘛教」対策構想に見るその特徴の第一は、その活動の本拠を承

徳に置くということである。彼の日記には、例えば、当時情報工作の中心的存在であった関東軍参謀長小磯国昭宛に、「対蒙工作に熱河廟利用の件を提案」（1934年1月24日付）した等の記述が見える。これは、最初の大陸訪問からの帰国直後に書かれたもので、多田が初めて自分の目で満洲及び内蒙古、承德を見たこの時点で出した結論ともいえる。そしてこの点で多田の考えは、当時の関東軍のモンゴル工作構想と同軌のものであった。当時の関東軍の構想は、「経済、文化的施策により同地方蒙民をして不知不識の間附満親日たらしむる」（関東軍参謀部「対察施策」1934年1月24日付、『現代史資料』第8巻、みすず書房、1977年、468-471頁所収）ことに主眼がおかれており、「喇嘛教」工作としては、「パンチェンラマあるいはこれに代わる老ラマを指導者とし、ドロンまたは承徳のラマ廟を本山として、内蒙古一帯にある各ラマ廟を統一する」（浅田弥五郎「多倫付近の情況」森久男『日本陸軍と内蒙工作』講談社、2009年、140頁所収）ことが考えられていた。

しかし関東軍と多田とが大きく異なるのが、その具体策である。多田が構想したのは、大蔵経を軸にモンゴル地域の仏教復興を目指すものであり、一方関東軍のそれは、チベット仏教寺院の再編成とその「改革」によって、チベット仏教勢力を効率的に把握しようとするものであった。両者が持つ背景およびおかれた立場を顧慮すれば、この違いは当然のものである。このような状況下で多田が実際に、軍および満洲国政府に提案したのは、満洲語文大蔵経の出版と、それを基礎としたチベット仏教研究機関の承德設置、そして併せて承德諸寺院の改修を進めるというものであった（例えば1934年7月18日付）。

このような多田の構想の背景には、まず、大陸で目にした満洲とモンゴルの実情があると思われる。日記には、現地において医療・経済支援と共に、宗教工作の必要性を痛感している記述が見られる（1933年12月15日付）。その他、帰国後、大陸旅行中に訪ねた名利貝子廟の幹部僧侶から、仏教保護を日本に期待する旨の書簡が届いたことが書き留められている（1934年5月15日付）等、満洲・内モンゴルにおけるチベット仏教の状況に強い問題意識を持っている記述が散見される。

加えて、彼の構想の背景には、10年に及んだチベット・ラサでの経験があると思われる。提案三項目のうち、熱河承徳の諸寺院の修理については、その荒廃は既に、多田の承德訪問の3年前、1930（昭和5）年に熱河入りしたスウェン・ヘディン（1865-1952）も伝えており³⁾、その喫緊の必要性はいわば、衆目の一致するところであったと思われる。一方大蔵経の出版と仏教研究機関の設置に関しては、ダライラマ13世によるラサ版開版を目の当たりにしたことと、ラサの名

(4) 日本人入藏僧資料に見る戦時期「喇嘛教」工作と熱河承德（高 本）

刹セラで10年学びゲシェーの学位を取得した修学経験の反映がうかがわれる。

多田のこのような構想は、その後どのような経緯を辿ったか。ここでは、彼が最も重視した大蔵経の出版を例として以下述べる。

最初の大蔵訪問から帰国した直後、1934（昭和9）年2月初旬、承德にある満州語文大蔵経が「発見」されたと報道され、注目が集まった⁴⁾。これは水野梅暁（1877-1949）が承德殊像寺でその存在を確認し、更に多田に内容の調査を依頼していたもので、多田の帰国をまって、新聞に発表されたと思われる。その後同年4月から8月にかけて、関東軍要路の人々の賛成も次々に得、8月には満洲国政府内で「愈可決」（8月18日付）という段階まで進んだ。1935（昭和10）年に入ると、印刷所の見積もり等もでき、満洲国政府の予算折衝の結果を待つのみという状況になったが、同年7月、結局予算が計上されず、出版は頓挫という結果となった。多田には、他に支援者を探してあくまで出版を目指したいという気持ちがあったようだが（1935年9月23日付）、結局これは実現しなかった。その他の2項目、承德諸建築の修理については、建築史学者である伊東忠太（1867-1954）らによって、1935（昭和10）年より満洲国政府の事業として開始される⁵⁾。しかしチベット仏教の研究機関設置に関しては、多田の日記を見る限り、以後の経緯は不明である。

4. おわりに

当時、多田のこのような活動は、どのような意義を持っていたのか。それを最初に示す資料は、最初の大蔵行の際、1933（昭和8）年8月31日に新京の関東軍本部で手渡されたと思われる同日付の「訓令」「指示」2種の書類である⁶⁾。

これらによれば、関東軍によって多田の使命とされたものには2種ある。その第一は「喇嘛教研究」すなわち、チベット仏教の専門家としての情報収集とその分析である。関東軍が必要としたのは、具体的には、「喇嘛教ノ宗教的価値」、「其勢力ノ消長」、「該宗教ニ対スル民心ノ趣向」、「将来之利用方法」に関するもの、つまり「喇嘛教」が、関東軍の工作及び今後の大蔵における日本人の活動にとって持つ利用価値と、その具体的な利用方法の策定に資する情報の収集・分析である。これらの情報は、日記原文を見る限り、文書及び口頭で随時関東軍本部へ報告として提出されたと思われる⁷⁾。

加えて、「喇嘛教」事情教育にも、専門家として多田が活用されている。帰国後、彼は陸軍参謀本部をはじめ、海軍の施設等でも「喇嘛教」について講演をしている。特に、多田の最初の大蔵訪問の半年前に、「満蒙」現地での宣撫工作の重要

な一環を担うべき機関として設立されたばかりの善隣協会では、複数回の講演の上に、同会が現地に派遣する医療班への助言や、「喇嘛教」に関するパンフレットの執筆等も依頼されている。

使命の第二は、「喇嘛教徒トノ連絡」である。これについて、具体像を示すのが、満鉄調査員木原林二による報告書「多倫及郭家屯地方農業調査報告」である（前掲森『日本陸軍と内蒙工作』145頁所収）。関東軍は木原に、多田の最初の大陸訪問と同時期の1933年11-12月、内蒙古工作の予備調査を依頼、同報告書はその記録である。現地対策としては、「商品館の設立」、「衛生設備」、「獣医の派遣」、「航空路新設」、「情義の連繫」の5項目が挙げられている。最後の「情義の連繫」は、現地における具体的な人脈の形成を含むものだと思われるが、これこそ、関東軍が多田に期待した役割の最大のものではないかと考えられる。多田はラサの名刹セラ寺院でチベット仏教の正式な学位を得、またセラ滞在中はモンゴル出身者の寮に居住していた。つまり、学位保持者として寺院上層部との対話が可能であり、またセラ時代の人脈から現地モンゴル人僧侶との具体的な連繫も期待できるということである。多田が大陸に呼ばれるその直前から、当時関東軍は、承德を中心に該当地域に特務機関の分派機関を設置しつつあり、多田はこれらの諸機関と緊密な連絡を保つように指示されている（上掲「指示」）。これら特務機関の活動展開の円滑化に貢献が見込める人材として、多田が考えられていたと思われる。

然しこの後、1934（昭和9）年1月の林銑十郎の陸軍大臣就任から始まった、関東軍中枢部の人事的変化の影響は、1935（昭和10）年前後から内蒙古工作にも大きく出始める。すなわち、経済・文化的工作によって満洲・日本への親和的合流を目指すものから、軍事的・政治的工作によって、内モンゴルに地方独立政権を樹立するといった、いわば急進的な姿勢へと変化する。その結果、多田が主張する大蔵経出版を基礎としたチベット仏教の復興といった提案は、優先順位を大きく下げたということになると考えられる。

-
- 1) 日本人の対「喇嘛教」活動に関して、まとまった最初の研究としては Paul Hyer の “Lamaist Buddhism and Japanese Policy in Mongolia” (master's thesis, University of California, 1953) がある。当時まだ健在であった関係者へのインタビュー、および米国接收の外交史料の分析が含まれるという点で特に貴重である。Li Narangoa の *Japanische Religionspolitik in der Mongolei 1932-1945* (Wiesbaden: Harrassowitz, 1998) は、日本仏教各派の機関誌および関係者の個人資料の一部を用いた研究であり、日本仏教の活動を初めて包括的に示し得たという点で優れたものであると言える。また、秦永章『日本

(6) 日本人入蔵僧資料に見る戦時期「喇嘛教」工作と熱河承德（高 本）

『涉蔵史』（北京，中国蔵学出版社，2005年）は，中国側外交史料の併用という点で有益な研究成果である。また，真言宗の活動については，第二次世界大戦期の宗教諸工作を考察した大澤広嗣が，同派の「喇嘛教研究所」を取り上げている（「昭和前期における真言宗喇嘛教研究所の学術活動について」『大正大学大学院研究論集』32巻，2008年）。更に平塚市宝善院住職の松下隆洪が，真言宗関係機関誌の記述を博搜して作成した「真言宗中国開教史」（<http://www.houzenin.jp>）には，「真言宗中日密教研究会・対ラマ教活動」の項目があり，研究論文ではないが非常に有益な成果であると言える。その他，高本康子「真言宗と「喇嘛教」—田中清純の活動を中心に—」（『群馬大学国際教育・研究センター論集』第11号，2012年，15-28頁）がある。

- 2) 寺澤尚「昭和8年，多田等観が渡満したことについて」（『花巻市博物館研究紀要』第6号，2010年，3-12頁），同「多田等観の渡満について—昭和9年を中心に—」同第7号，2011年，3-15頁）。
- 3) ヘディン例えば，「多くの仏堂は崩壊の徴を示し，心無き兵隊の斧に伐り倒された松柏も少くない」（ヘディン『熱河』黒川武敏訳，地平社，1943年，28頁），「この儘にして過せば十年或は二十年にして全くの廢墟と化するであらう」（同，42-43頁）と述べている。
- 4) 例えば「熱河の喇嘛寺から研究の舞台へ」『東京朝日新聞』1934年2月3日付。
- 5) 承德の諸建築に対する昭和期日本の建築家の活動については，田中禎彦の一連の研究が詳しい。すなわち，「熱河古蹟」に関しては，田中禎彦・青井鉄人「満州・熱河古蹟調査の概況とその評価の特徴について」（『日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）』，1997年9月），91頁，田中禎彦「満州国における熱河古蹟の調査保存事業—日本植民地における歴史的建造物の調査保存と異文化理解—」（『日本建築学会計画系論文集』第569号，2003年，201-208頁），満洲国政府による文化財保存事業の全体像については，同「満州国における歴史的建造物の調査保存事業」（同第525号，1999年，273-280頁）がある。
- 6) 「関参二命第四〇号 訓令」（関東軍司令官菱刈隆発），「関参二命第四一号 指示」（関東軍参謀長小磯国昭発），いずれも多田等観宛，1933年8月31日付，多田家所蔵。翻刻は前掲寺澤尚「昭和8年，多田等観が渡満したことについて」6頁所収。
- 7) 例えば，1933（昭和8）年の第一回の渡満の際は，満蒙滞在のスケジュールが大部分終了した12月15日に，関東軍参謀副長に滞在中の報告を行っている。

（本研究は2011年度文部科学省科学研究費補助金挑戦的萌芽研究「戦時期メディアにおける「喇嘛教」表象に関する研究」による研究成果の一部である。）

〈キーワード〉 昭和期，宣撫工作，満洲国，関東軍，喇嘛教，多田等観
（北海道大学スラブ研究センター学術研究員，博士（国際文化））